平成２６年度学生支援プロジェクト事業成果報告書

三俣山荘における登山者支援プロジェクト

代表者　　香西　勝平　（医学部医学科３年）

１．目的と概要

　このプロジェクト事業は、北アルプスの三俣山荘に併設された診療所で夏季に行われている診療活動に関して、診療器具の充実による医師の診療環境を整えること、登山客の安全のために登山知識を広めることを目的とします。

２．実施期間（実施日）

平成２６年７月２４日　から　平成２７年８月２６日まで

３．成果の内容及びその分析・評価等

　このプロジェクトは、近年の登山ブームで登山に臨む方が増えている中で、登山に関する知識や緊急事態に備えた事前の準備が不十分な登山者も多く、怪我や病気にかかる方が増加する傾向があることを受けて立ち上がりました。私たちは、学生の立場でできることを考えながら、診療活動に参加しました。具体的には、安心して診察を受けられるよう診療環境を整える、医師の診察前に予診を取る、器具の洗浄や管理を行うなどです。今年はオートクレーブ用カスト、超音波洗浄機、酸素流量計を新たに導入しました。カストと洗浄機は器具の洗浄、殺菌に大きな効果を発揮しました。また、酸素流量計を用いることで、酸素吸入時の酸素流量を正確に把握することができるようになりました。また、予診を取るために前もって練習し、準備をして臨みました。

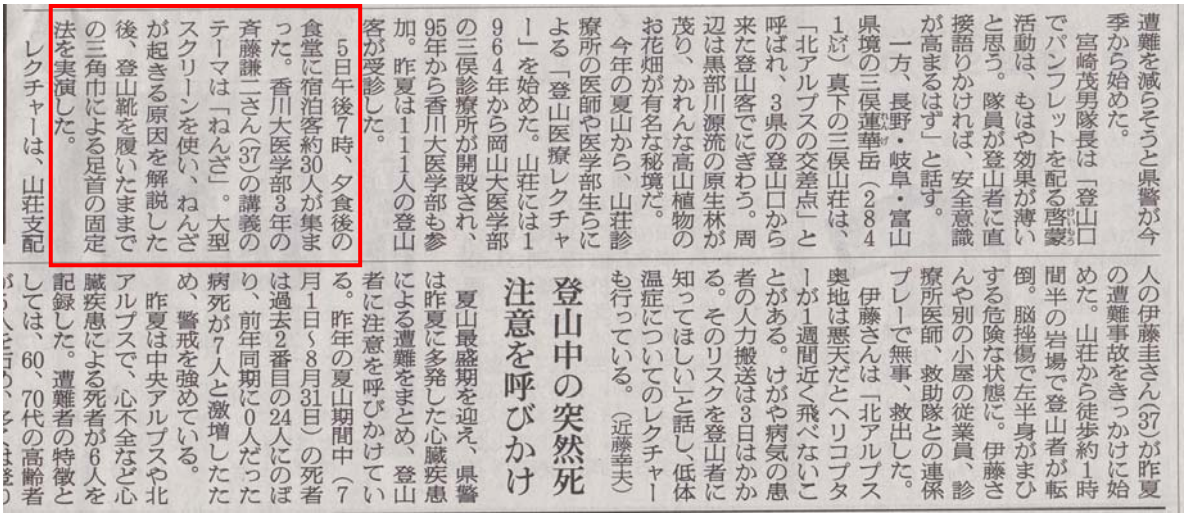
　また、登山者の方々に安全への意識を持っていただくため、今年度からの新しい試みとして、登山においてリスクの高い「低体温症」、「捻挫」についての講習を山荘で行いました。隔日で行ったところ毎回２０～３０人と多くの方に参加して

いただき、質疑応答も活発に行われるなど充実したものになりました。「捻挫」については実際に三角巾を使って応急処置を実践していただく参加型の講習となり、参加された方から好評でした。前もって勉強会をして準備をし、先生や班員とコミュニケーションを取って行ったこの講習会は、私たちにとっても、とても実りのあるものとなりました。

また、三俣山荘だけでなく、近隣の山荘にも活動を広げています。三俣山荘の近くには水晶小屋や雲ノ平山荘といった山荘があり、そちらの薬剤管理も今年度から行っています。近隣とはいえ山荘間の道のりは長い登山道であり、その移動に合ったサイズのザックを装着し、それによって無駄な体力の消耗を防ぐことができました。また、大学名と三俣診療班の名前の入ったザックカバーは、わたしたちの活動を広く知っていただくのに役立ちました。

４．この事業が本学や地域社会等に与えた影響

登山は楽しいものですが、同時に大きな危険を伴うものでもあります。地上では軽い怪我で済むようなことでも、山上では大けがにつながる可能性があります。このプロジェクト事業を実施したことで、診療所の環境改善や設備の充実により、診療の安全性を高めることができました。また、登山の過程で起こりやすい怪我や病気に関する講習会を行うことで、登山者に登山に伴う危険を認識してもらい、知ってもらうことができました。もちろん登山客の中にはしっかりと安全対策をされている方もいらっしゃいますが、十分な知識もなく軽い気持ちで登山に臨まれる方もいます。そのような方々にも、考えを改めていただくことができました。２０１４年８月１３日の朝日新聞に、講習会の活動が取り上げられましたので紹介させていただきます。３年生による捻挫についての講習を記事にしていただいています。



遭難を減らそうと県警が今季から始めた。

宮崎茂男隊長は「登山口でパンフレットを配る啓蒙活動は、もはや効果が薄いと思う。隊員が登山者に直接語りかければ、安全意識が高まるはず」と話す。

一方、長野・岐阜・富山県境の三俣蓮華岳（2841㍍）真下の三俣山荘は、「北アルプスの交差点」と呼ばれ、3県の登山口から来た登山客でにぎわう。周辺は黒部川源流の原生林が茂り、かれんな高山植物のお花畑が有名な秘境だ。

今年の夏山から、山荘診療所の医師や医学部生らによる「登山医療レクチャー」を始めた。山荘には1964年から岡山大医学部の三俣診療所が開設され、95年から香川大医学部も参加。昨夏は111人の登山客が受診した。

5日午後7時、夕食後の食堂に宿泊客約30人が集まった。香川大医学部3年の斉藤謙二さん(37)の講義のテーマは「ねんざ」。大型スクリーンを使い、ねんざが起きる原因を解説した後、登山靴を履いたままの三角巾による足首の固定法を実演した。

レクチャーは、山荘支配人の伊藤圭さん(37)が昨夏の遭難事故をきっかけに始めた。山荘から徒歩約1時間半の岩場で登山者が転倒。脳挫傷で左半身がまひする危険な状態に。伊藤さんや別の小屋の従業員、診療所医師、救助隊との連係プレーで無事、救出した。

伊藤さんは「北アルプス奥地は悪天だとヘリコプターが1週間近く飛べないことがある。けがや病気の患者の人力搬送は3日はかかる。そのリスクを登山者に知ってほしい」と話し、低体温症についてのレクチャーも行っている。（近藤幸夫）

登山中の突然死 注意を呼びかけ

夏山最盛期を迎え、県警は昨夏に多発した心臓疾患による遭難をまとめ、登山者に注意を呼びかけている。昨年の夏山期間中（7月1日～8月31日）の死者は過去2番目の24人にのぼり、前年同期に0人だった病死が7人と激増したため、警戒を強めている。

昨夏は中央アルプスや北アルプスで、心不全など心臓疾患による死者が6人を記録した。遭難者の特徴としては、60、70代の高齢者が5人を占め、多くは

５．自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

今回のプロジェクトでは、山上の決して十分に整っているとは言えない施設での医師による医療を間近で見ることができ、医療に対する関心を高め、将来医師になるものとしての自覚を高めることができました。また、できることが限られた環境において自分たちにできることを考えて協力し合いながら計画、行動することで、自主性や、協調性が養われました。普段は医学生以外とはなかなか関わることがないため、診療所で診療活動を行う医師や診療所を訪れる患者さんと接しコミュニケーションをとることは、とても良い刺激になりました。

↑学生による発表の様子

６．反省点・今後の抱負（計画）・感想等

今回のプロジェクトの反省点を話し合ったところ、下記の意見がありました。

・近くの地形についてもしっかりと勉強し、登山ルートについてのアドバイスなどもできるようになるとよいのではないか。

・天候などによる不測の事態に対する準備や計画が不十分だったのではないか。

・今回の講習会の内容以外にもまだまだ呼びかけが必要だと思われる内容があるので、それらについても講習会を増やしてみてはどうか。

これらは、学生同士の自主的な勉強会により改善できる部分も多くあります。そうでない部分も先生の意見を聞きながら、来年度はこれらの問題点を改善できるよう、話し合って準備を進めています。

７．実施メンバー

代表者　香西　勝平（医学部３年）
構成員　鷲尾　恵梨（医学部２年）
　　谷本　慧太（医学部５年）
　　中谷　　元（医学部３年）
　　似吹　達弥（医学部３年）
　　堀尾　祐希（医学部２年）
　　露口　悠太（医学部２年）
　　藤原佳代子（医学部３年）